



一般社団法人
JSHA 日本人間学会 会報

Japan Society Of Humanistic Anthropology Association
日本学術会議 協力学術研究団体

No.28 2025年春号

〒180-0022 東京都武蔵野市境 5-4-3-405 ☎ 0422 (38) 5075
HP : <http://www.ningengakkai.or.jp> E-mail: office.ningengakkai@gmail.com



会報 2025年 春号

- ◆ 日本人間学会 創設 40 周年に向けて
- ◆ 【講演文】ネパールの平和のための国民対話と和解
- ◆ 日本の教育問題について考える
最終回 「教育論」の掲載を終了して
- ◆ 事務局からのお知らせ
- ◆ 編集後記

日本人間学会 創設 40 周年に向けて

代表理事 滝 順一郎

本年 10 月、日本人間学会は創設 40 周年という重要な節目を迎えます。この記念すべき時を前にして、学会の沿革を振り返り、今後の展望を述べてみたいと思います。



我が国における人間学の草分けである高島博医師は、ウィーンの精神医学者ヴィクトール・フランクルと交流をもたれ、フランクル氏の、いかなる病にも意味と価値を見いだすことが出来るという実存分析（ロゴセラピー）を導入した「実存心身医学」を実践しておられました。物質文明の進歩により、すべての学問分野における研究は専門化し、「人間」不在の研究となっていることを憂えられ、1985年、各分野の専門家と共に、専門諸科学のみでは説明し尽くせない人間存在の問題を「人間学」という「学際的」な場において研究しあう「日本人間学会」を創設されました。

元代表理事今村和男先生は、湯川秀樹博士門下の物理学者であられ、太平洋戦争という状況下、戦闘機開発とテストパイロット

トを務められた経験をお持ちでした。特攻隊員から「後の日本をお頼みいたします」と日本の繁栄と平和を託されたという責任感から、常日頃から混迷する世界情勢を憂えておられました。

今村先生は国際科学振興財団の専務理事当時、高島博先生と臓器移植、生命倫理、医学における哲学の重要性につき議論を交わされました。さらに、世界で起きている多くの問題の根本的原因は人間の心の在り方にあり、歴史的な哲学上の誤りや、人間や社会における重要な提題の解答が得られていないという点が深く影響するため、その解決に向けて「哲学的人間学」研究の重要性を見出されました。また、それら研究成果を机上の空論にしてはならず、社会への具体的な貢献ができるこそ実学であるという理念のもと実学的人間学の構築に務められました。

前代表理事勝本義道先生は、当会専務理事当時、今村和男先生を支えられ、人間の本質解明には、西洋的な理性的論理だけではなく、東洋哲学、特に日本で育まれた情操的な精神文化が重要と考えられました。現代科学の研究成果や、神学、宗教教義に示された宇宙観や人間観も含め、広く学際的な観点から真理を探究され、その成果を「情然の哲学」に著されました。さらに、社会貢献としてエマニュエル・ベベニヨン教授（ベナン共和国出身、研究会員）とともに和解運動を推進されました。

ここで少し和解運動について触れておきましょう。

和解運動とは、ベナン共和国が推進した国際プロジェクトです。ベナン共和国は二つの大きな和解の実績があります。18世紀のダホメ王国時代、大西洋奴隸貿易の中心地として、西欧諸国の奴隸商人と結託し、同じ現地人 2500 万～ 3000 万人を奴隸と



高島 博先生



今村 和男先生



勝本 義道先生

して国外に送ったという歴史的事実があります。欧米に奴隸として強制移送された人々の子孫との怨恨を解くため、(1) 事実を認める、(2) 過ちの認識、(3) 謝罪と許し、という 3つの原則により国家プロジェクトとして和解と発展を推進してきました。

もう一つは、マルクス・レーニン主義による社会主義国家体制にあった 1989 年に国民会議を開催し、時の大統領との数次にわたる話し合いの結果、武力によらず平和的に社会主義体制を放棄して、多党制民主主義を導入し民主化を成功させた実績があるということです。歴史的にみると、こうした国家体制転換は必ずといってよいほど武力により多くの人の犠牲の上に成立しています。そのため、このベナンの無血による民主化プロセスは特筆すべきこととして当会は注目しました。そして、これら 2 つの和解プロセスを学術的に研究し当会の社会貢献活動に位置づけました。

2009 年、当会がベナン共和国を訪問して以降、ベナン政府関連機関との関係を深め、2010 年 12 月には、当会の後援でベナン独立 50 周年記念行事を東京で開催しました。

その後の対外活動は、コロナ禍に見舞われたこともあって縮小しましたが、ベベニヨン教授は当会と共に推進してきた活動実績を整理し、2022 年「ベナン発 和解から平和へ」

を出版され、さらに活動を広げておられます。

和解運動を通じた交流活動からネパールとのつながりも生まれました。

2010 年、ベナン共和国の協力によりネパール現地にて平和セミナーが開催されました。

2010 年当時のネパールは、約 240 年続いた王政が 2008 年に廃止され、連邦民主共和制への移行が決定したばかりの不安定な国内政情でした。特に新憲法制定への動きが活発化し、複数の政党が互いに主導権争いを展開していたのです。そうした最中、当会一行の現地訪問時には、大統領をはじめ、各政党党首との面会が実現し、その席でベナン共和国で成功を収めた和

解の事例、及び当会が研究してきた「平和哲学」を紹介する機会を得ました。

ネパールが、中国とインド という 2 つの巨大な隣国と米国との間の政策と経済のバランスをとる立場にある国家であることをみますと、今後も自治と和解への取り組みは必要不可欠になります。ネパール宗教間評議会創立者・事務局長で後に当会研究会員になったケシャブ・プラサド・チャウラガイン氏は、この時以降ネパールにおける和解キャンペーンを主導され、その結果、753 の地方自治体に「司法委員会と地方自治体：和解へのロードマップ」が採用されるようになり、和解の原則の実践を果敢に推進しています。

ここ数年当会の活動の流れはもっぱら論文発表が中心となりましたが、その中でも崎谷満先生（研究会員）の精力的な活動が目立ちました。

崎谷先生は新型コロナウイルス・パンデミックによる社会構造の変革が余儀なくされた中で、「新型コロナウイルスとどう向き合うか」（昭和堂）を著し、（当会ホームページに掲載）人類共通の敵である新型コロナウイルスに対する対策と今後の社会における指針を示されています。思想・信条・言論の自由。研究成果の自由な共有の下での、世界の科学者の協力・連帯。人類共通の敵に対する多文化共存の重要性。人々の行動様式、特に自律性に基づいた感染予防策の施行。都市集中から地方への機能分散と地域創造。社会再生における文化的精神性の重要性などです。

また、論文「アンネ・フランク、ヴィクトール・フランクル、樋口季一郎、杉原千畝からホロコーストの原点を学ぶ」（会報 25 号掲載）を発表し、その中で、ユダヤ人ホロコーストを忘れないこと。憎しみを超えた和解の道を探ること。対立を超えた普遍的な視点による自律的な判断による人道的行動の重要性。宗教対立の次元を超えた普遍的宗教性の意義と宗教的寛容の重要性を示されています。

2022 年 2 月に勃発したロシアによるウクライナ侵攻やイスラエル・ハマス戦争など、世界各国における紛争は、宗教的、民族的問題。過去の歴史における領土問題が影響しております。



エマニュエル・ベベニヨン教授



ケシャブ・プラサド・チャウラガイン氏



崎谷 满博士

新しい世界秩序を構築するには、愛の秩序に基づいた過去の歴史を許しあう和解の精神が重要となります。プラトンのいう正しい哲学を持った国民と政治家による国家秩序、世界秩序の形成が重要であります。正しい哲学により、新しい国際政治のルールを作り、パラダイムシフトをおこすべき時代であると考えております。

身近な問題では、今年就任した米大統領が就任直後に“性別は男性と女性の2つのみの性別しかなく変更できない”という大統領令を出し、日本においては選択的夫婦別姓法制化の議論がなされています。

家庭の意義について思想史を振り返ってみると、西洋思想の背景にはキリスト教思想がありますが、個人の信仰が基本となるため「個の存在」「個人」としての哲学になり、家庭についての思想はあまり見受けられません。

一方、マルクスの共産主義思想には「社会における支配と被支配の階級闘争の最も原因となっているのは家庭内の夫と妻や親子関係にある。したがって、伝統的な家族の関係性を切り離し個人の人権を取り戻さなければならない」とあります。

家庭は子供にとって安心と平和、そして愛と調和をもたらす場であります。子供は親子、兄弟姉妹の家族関係のなかで、様々な経験をし、学んでいきます。体はもちろん心も——つまり人間そのものが、まずは家庭のなかで形作られていくといつても過言ではありません。つまり、人間は家庭という情的空間のなかで流れる情を実体的に感じ自分の心身を成長させます。さらに、家庭の秩序は愛によってなされます。

それゆえ、愛とは何か。人間が存在論的になぜ男と女なのか。なぜ結婚するのか。なぜ夫婦になるのか。なぜ家庭を作るのか。「情熱の哲学」で示した内容をさらに発展させた哲学的人間学としての家庭論を、今こそ構築することが急務だと考えております。

本年は学会創設40周年を記念して、10月には記念イベントを開催し、これまでの成果を共有するとともに、未来へのビジョンを確認し合う機会としたいと考えております。

今後も希望に満ちた学会活動を通じて、より多くの実りある出会いや知的交流が生まれることを願いつつ、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

日本人間学会
代表理事　瀧 順一郎



NATIONAL DIALOGUE AND RECONCILIATION

FOR PEACE IN NEPAL

ネパールの平和のための
国民対話と和解

講演者：勝本義道 前代表理事

2010年9月4日

ネパール・シャンカーホテル

2010年9月、当会一行がネパールに訪問した際、現地シャンカーホテルにて開催された「ネパールの平和のための国民対話と和解」集会にて前代表理事（当時専務理事）勝本義道先生がスピーチされた内容全文をご紹介します。

15年という歳月を流した今も世界の情勢は混乱を極め、このスピーチで語られた内容は依然として私たちの大きな課題として取り組むべきものであります。

当時この内容は会報で紹介されなかったことから、今回の掲載に至りました。（編集部）

ネパールの国を代表する貴賓の皆様、親愛なる紳士、淑女の皆様、本日は、平和と和解をテーマにしたこの「National Dialogue and Reconciliation for Peace in Nepal」にご招待くださいまして、心から感謝申し上げます。

日本人として、まずネパールの全国民の皆様に感謝を申し上げたいことがあります。それは日本の古い昔このネパールの地に生れた釈迦の教えが日本に伝わりました。日本は仏教から多くのことを学び、その時から「和の国」「大きな和の国」として平和を目指す民族性を身につけることができました。長い歴史の中には様々な闘いもありましたけれども、日本人のこの血の中に平和を愛する「和の精神」があると信じています。

さて、「平和」「幸福」「発展」という言葉は、全世界の全人類が求めている言葉であり、誰もがそれを実現したいと願ってい

ます。それは、現在を生きる我々だけではなく、有史以来人類が求め続けてきた理想であります。社会犯罪や貧困、民族や国家間の闘いのない世界をどれだけ強く願ってきたことでしょう。

しかし、残念ながら、人類は未だかつてこの理想を実現したこと�이ありません。それでは、なぜこの理想を実現できなかつたのでしょうか。

人間の持つ知能は、他の動物に比べて比較にならないほど高度な能力を持っています。今では、月はもとより太陽系の惑星に次々にロケットを飛ばし、その実態を明らかにしつつあります。また、天文学や理論物理学では、宇宙の始まりの姿を突き止めつつあります。生物学や医学の発達も目覚ましく、クローン技術を始め、ゲノムの解説など、かつてSF小説で未来の夢として描かれていた高度な科学文明社会が我々の生きている今の時代に実現しつつあるのです。

しかし、その反面、高度な科学的研究成果は、恐ろしい戦争兵器をも作り出しました。核兵器を始めとした様々な近代兵器は、全人類を一瞬にして殺害し、全生物を消滅させるにあまりあるほどの規模に達し、平和のために用いられるべき科学が逆に人類に大きな不安と恐怖を与えていているのです。

それでは、平和はどのようにして作られるのでしょうか。核兵器をなくせば平和ができるのでしょうか。私も核兵器の廃絶には大賛成です。しかしながら、核兵器をすべてなくしても、人類は他の通常兵器を用いて戦争をするでしょう。たとえすべての戦争のための兵器をなくしたとしても、人間は、自然の中にある石や木片を使ってでも闘いをします。

それでは、武器を使うための手を縛ったとしたら、闘いは終わるでしょうか。そうなれば、人間は口を使い、言葉で他者を傷つけます。それでは、口を塞げば良いでしょうか。それでも闘いは止まりません。口を何かで塞いだとしても、人間は目で他者を睨みつけ、恐怖を与え、心を傷つけ、殺してしまうかもしれません。日本では、「目は心の窓」と言います。心の中を見る窓であり、目は口よりも直接的な言葉を心に向けて発するのです。

闘いの原因は、人間の「心」にあります。東京にあるベナン共和国のヤッソ大使は、「戦争は人間の頭の中の考えにある」と語られました。一人の人間の中の考えが闘いの考えに染まっていれば、それが外的に表れ、様々な社会犯罪や戦争を生み出します。哲学者パスカルは、人間は「考えるアシである」と言いました。それは、人間が他の動物と比べて卓越している特徴が、人間が高度な思考能力を持っているということです。これは正しい見解だと思います。しかし、この高度な思考能力がかえって人間に多くの不安と恐怖を与えているのです。

それでは、高度な思考能力だけが人間の本質なのでしょうか。私は、人間の本質は人間が持つ情的性質にあると考えています。人間の本質が心であることは間違ひありません。その心の特徴



ラカム・チェンジョン (Rakam Chemjong) 平和復興大臣（右）
に和解と発展のパネルを贈呈する勝本前代表理事

は思考能力だけではなく、「情」の動きにあるのです。

親が子女を愛する犠牲的な情、夫が妻を愛する情、家族愛、人類愛、また、自然を愛する愛情、人間の最大の本質は愛情の質の高さにあります。もしも、全人類が心に高度に完成された愛の情を持っていたならば、一切の社会犯罪や国家間の戦争もなくなることでしょう。人間の心の構造は、思考能力と情の働きによってできているのです。

もしも、人類の闘いの原因が心の中にあるのであれば、この思考と情のあり方に問題があると言わざるを得ません。故にそれが「平和」や「幸福」「発展」を破壊する原因なのです。心の重要な機能である思考と情が誤ったものであり、矛盾した闘争の形態になっていたとすれば、平和を実現することはおろか、幸福を奪い、発展を妨げるものとなるでしょう。

第2の問題は、情の方向性と成熟度にあります。情には、利他的な情と利己的な情があります。利他的な情は、親が子女を愛する姿に最もよく表れています。自己犠牲を惜しまず、他者のために生きる公益的な愛情です。この愛情が拡大されて家族愛、民族愛、人類愛になっていくことによって平和は実現されるのです。

しかし残念ながら、人間にはもう一つの全く逆の情の方向性があります。利己的な情、即ちエゴイズムという情が心の奥に潜んでいます。この情は、自分を中心とし、他者を犠牲にします。この情は、決して調和を生み出すことはありません。人と人との関係を破壊し、闘争を生み出します。ですから、小さな子どもから大人に至るまで、心に利他的な情を育てる教育が必要です。公益的な心を備えてこそ、人格の人間としての尊厳を成すのです。平和を実現するには、これらの誤った「思考」と「利己的情」をなくさなければなりません。従って、人類に最も必要なものは、「正しい思考」と「利他的情」であります。

歴史上に人類が築いてきた思考や哲学には、自然や人間、社会の本質を「闘争」と見たものがいくつかあります。弱肉強食

による自然淘汰による進化論や発展の原理を対立関係における「闘争」を教える哲学を真理とみる思想です。現在多くの国々で小さな子どもたちに学校でこのような闘争の思想を教えています。子供たちに闘争と強者だけが生き残る存在の哲学を教えたならば、どうなるでしょうか。当然、家庭で争いが起き、社会で、国家で闘い、世界で闘うようになるでしょう。強者として自分だけが生き残るためにです。

しかし、存在の本質や発展の本質は「闘い」ではありません。自然の法則、自然の存在原理は「調和」です。存在は、勝ち残った強者により、実現されるのではなく、他者との関係における「調和」により実現するのです。人間社会も自然界も愛の「調和」によらなければ、存在することはできません。これこそが真理であります。そして「調和」は、利他的な公益的情の成熟度によって実現されます。

今、人類は、絶対的平和思想が必要な時にきています。「平和」と「幸福」と「発展」は、「調和」を実現する全き真理と利他的な情を完成させることのできる教育を必要とします。そして、心を正しく完成させたときに、万物の愛の主人としての本然的な愛の人間になり得るのであり、愛による眞の平和と眞の幸福と眞の発展を実現し得るのです。

「和解」は許しの心と利他的な愛情、そして絶対的平和を実現するための「調和」の哲学が必要です。そして、皆が心から信頼し合い一つとならなければなりません。私たちの「和解」運動は、ベナン国家から始まり、大きな成果を上げました。そして、今、日本と一つとなって、学術学会である日本人間学会によって長年研究されてきた新しい調和の哲学的思考を提示することにより、眞の平和と幸福と発展を実現するための理想国家のモデル作りが始まりました。

この運動は、偉大な仏教の開祖、釈迦を生み出したこの国、ネパールで世界に先駆けて、和解による眞の平和と幸福と発展を実現することが可能であると希望を私たちは抱いています。それは、将来、世界が理想世界となるための素晴らしい見本、モデルケースとなるに違いありません。

ネパールには高い山、高い人間性、そして多くの高い宗教が共存しています。この歴史と精神を持った国で、現在の一時的な混乱を乗り越えて、世界に先駆けて理想国家のモデルケースを実現することを願っています。ネパールがそれを実現した時、理想世界となるための素晴らしい見本、モデルケースとなるに違いありません。そのための協力を日本としては全面的に出していきたいとそのように考えております。

ご清聴ありがとうございました。



日本の教育問題について考える

—日本人間学会からの提言—

最終回 「教育論」の掲載を終了して

研究会員有志一同

本誌では、これまで8回にわたって、「日本の教育問題について考える」というタイトルの記事を掲載してきました。その意図については第1回の「はじめに」のなかで述べていますが、再言すると、学校生活におけるいじめ、不登校、学級崩壊、非行などの問題を憂慮する立場から、「望ましい教育とはどのようなものか」という問題について学会としての提言を行う、というものでした。

コンテンツの掲載自体は前回で終了していますが、かなりの分量になったため、最後に全体のまとめをしてみることにした次第です。

以下の記事では、1回から8回までの内容を26の項目にまとめてあります。

教育に携わる者でなくとも、多くの市民が日本の教育の現状を知り、「教育は本来どうあるべきか」という問題意識を共有することは重要なと考えます。

今回の当会の提言が、今後の日本の望ましい教育のために少しでも役立つものとなれば幸甚です。

教育方法

1. 教育において、「学ぶ」とは知識を増やすだけでなく、思考力や集中力などの基礎力を鍛え、目標に向かって努力する意欲を持続することが重要です。また、知識、情操、意志をバランス良く育てることが必要です。

2. 日本の教育改革として「ゆとり教育」が導入されました。しかし、学力低下という望まない結果を招き、失敗と評価されています。知識教育と心の教育を対立軸として考えることに問題があり、両者は相補的な関係にあるべきです。

3. 「文武両道」は学力と体力を両立させるだけでなく、

心と体、感情と知性の相補的関係を強調し、全体的な人間力を育てることが重要です。また、知識を持つだけではなく、それを生活や仕事に活用する知恵を身につけることが求められます。

情操教育・知・情・意

4. 情操教育は、芸術や道徳、宗教など高次な価値を伴う感情の育成を目指していますが、実際の授業では知識教育を中心となっています。情操は「教えられるもの」ではなく、体験や実感を通じて育つものであり、他者との関わりや芸術鑑賞などを通じて、情操を豊かにすることが重要です。

5. 情育は、自己と他者の心を感じる力を養うことを目的とし、日常生活での感情の流れや、共感力、連帯感を育むことを重視します。感情の重要性を理解し、他者の心を想像し、理解することで、自己中心的な視点から脱却し、道徳的・公益的な人生を歩む力を身につけることが求められます。

6. 情感性と理性は相補的な関係にあり、情感性の豊かさを育むためには理性の働きが重要です。情育の目的は、理性と情感性の調和を図り、理性によって再解釈され、価値づけられ、記憶されることで情感性を豊かにすることです。

7. 意育は、志を立て、目標に向かう力を鍛えることを目的とし、自分で決めたことをやり遂げる力を養います。意志の成長には理性や情感性との調和・バランスが重要であり、理性によるチェックと反省を通じて、意志の強さを良い方向に生かすことが求められます。

精神・家庭

8. 心の教育は、心的要素と身体的要素の調和を重視し、実際に心を動かす体験を通じて心の成長を促すことが重要です。他者との触れ合いや多様な関係性を通じて、心の存在を実感し、相手や自分の心の動きを知り、感じるための理性や感受性を高めることができます。

9. 家庭教育は、躾やマナー、生活習慣の習得に留まらず、心身のバランスの取れた成長を目指すべきです。情の成長が重要であり、親や家族との情関係が特に重要です。家庭では生活そのものが教育であり、親の生き方が子供に影響を与えます。

10. 家庭教育の準備は、妊娠前から始めるべきで、親としての人格形成や夫婦関係の良好さが重要です。胎教も、知的刺激だけでなく、無条件の愛情や安らぎを伝えることが求められ

ます。夫婦間の情関係が良好であれば、子供の情的成長に理想的な環境が整います。

11. 子供に向かう愛情だけでなく、夫婦間の愛、さらに祖父母や先祖への敬愛も大切です。これを「愛の十字形」とし、縦横の愛の調和が重要です。家庭は子供が心身共に成長する場であり、生命が生まれ、愛が育まれる場です。結婚はその基盤となるものであり、家庭や国家の安定、さらには世界平和の土台となります。

価値観・愛・幸福

12. 値値相対主義の観点から、善悪の判断は価値観や宗教観、文化、時代によって異なるとされています。しかし、人間の良心は常に善を志向しており、プラトンやカントは絶対的な善が存在すると考えていました。

13. 人を苦しめることに対するためらいや抵抗感は多くの人が共有しております、悪と感じる行動を実行するためには大義名分や正当化が必要です。善を志向する良心の働きは普遍的であり、何を善とするかは価値観によって相対的であっても、善を志向する心の羅針盤は全ての人々に共通しています。

14. 私たちの心には「幸せに向かう心」も備わっており、幸福や喜びを求めるのは人間の本性です。真の喜びは相手を喜ばせることで得られるものであり、心と心が触れ合い、喜びが共鳴し、増幅されることで、本当の幸せが感じられます。人間は関係性の中で自分を認識し、家族がその基本的な関係性を提供します。家族の崩壊は個人や社会全体の崩壊につながる深刻な問題となります。

15. 愛は人と人を結ぶ情の流れであり、愛する対象に価値を見出し、大切にする力です。愛は引力と斥力の両方を持ち、愛する対象に近づきたいという気持ちと、一定の距離を保つ必要性が調和して作用します。愛は常に理想を目指し、理想に向かうことで愛が発展していきます。

利己・利他

16. 利己と利他是表裏一体の関係にあり、愛の場では利他的に生きることで利己的な欲求も満たされるとされています。真実の愛は利他と利己を調和させる力を持っており、愛する相手の幸せを願うことで、自分の幸せも達成されます。ただし、自己犠牲的な愛が必ずしも真実の愛とは限らず、溺愛や自爆テロのように愛が誤った方向に進むこともあります。

17. 愛の力が大きいからこそ、その方向や使い方を間違えると、社会全体に深い傷を負わせる可能性があります。愛の理想に向かう全体性と対立する場合、その愛は偽りの愛といえます。教育の現場では、愛の問題を深く考えるカリキュラムが必要です。

18. 個性と全体性の調和は、個人と社会の幸福の両立を目指す教育の基本理念として重要です。個人の成長と社会の調和を同時に追求することで、個性が輝きを増し、全体の幸福が実現されます。

19. 自己中心性と利己性は異なり、自己中心性は自分を中心として物事を考える性質ですが、利己性は他人の事情を顧みずに自分の思いを通そうとする傾向です。メタ意識を持つことで、自己中心性を自覚しつつ他者に寄り添い、対立を解消することができます。

20. メタ意識は、対立関係に融和をもたらすために必要不可欠であり、教育においてもこの視点を育成することが重要です。独善的な考え方対話を阻害し、良好な関係性を築くことを妨げるため、独善や利己主義からの脱却を目指す教育が必要です。

芸術・言語・歴史・宗教

21. 芸術教育は、メタ意識や想像力を養ううえで重要であり、クオリア（質感）を感じ取る心を育てることが、人生の意義を感じるために重要です。芸術的教育法は、子供たちが他者の心に思いを馳せ、自分の心を表現する手段として取り入れるべきです。

22. 日本語教育と外国語教育のバランスを取ることが重要です。日本語は関係性を重視する言葉であり、その表現力の幅広さが人格形成に大きく関わっています。母国語をしっかりと身につけることで、他の言語学習もより効果的になります。

23. 歴史教育では、データの記憶だけでなく、歴史的な出来事を追体験し、その時代の意味を把握することが重要です。歴史はあくまで一つの解釈であるという視点を持ち、様々な立場からの歴史観を学ぶことが大切です。

24. 宗教教育は、自分の存在理由や根源に向かう心を育むために重要です。宗教団体と宗教そのものを区別し、様々な宗教を理解し尊重することで、信仰者への差別や誤解を避けるこ

とができます。学校教育において、宗教の本質や宗教間の対話の重要性を教えることが有益です。

25. 性教育においては、性の本質的価値を理解し、愛と生命の神聖さを伝えることが重要です。性を恥ずかしいものとして隠すのではなく、夫婦二人だけの聖なる関係として尊重することが求められます。現代の子供たちの状況を踏まえた新しい性教育理論が必要です。

26. 情報リテラシー教育では、情報の受信と発信の両面からの教育が重要です。新聞やテレビの報道が必ずしも客観的事実ではないことを理解し、情報の背後にある立場や価値観を読み解く力を養います。また、インターネットやSNSの普及により、個人が情報発信者となる時代において、発信の際の責任や影響力についても教育することが求められます。



人間学

実存心身医学のアプローチ
高島博 原著
金城英興・岡野三四郎・村松憲行
共訳

目次

1. 現代人間哲学
2. ユーモアの人間学
3. 意味への意志と生命の極限状況
4. 人間の心の活動
5. 機能次元
6. ロゴセラピーと実存心身医学
7. 心技体から四次元の人間像へのアプローチ
8. 精神・頭脳・コンピューター 人間・動物・コンピューター
9. 体質・気質と性格 ---- 先天性性格と後天的性格
10. 精神心理拮抗作用
11. 従病 --- 病気とともに生きること
12. 苦痛・障害・病気
13. 疲労
14. 病気以前一病気でない病気
15. 「ロゴセラピー」応用の「心身医学」
16. 味の哲学・哲学の味

書籍代 2,000円（送料込） 購入ご希望の方は事務局まで

事務局からのお知らせ

当学会では一般会員として入会された方々に対し、次のような会員特典を新たに追加しています。

入会された方にもれなく、人間学のテキスト（菅野盾樹著『人間学とは何か』）を贈呈いたします。このテキストは、人間学の入門書として定評のあるもので、一読すれば人間学のおよそのことがわかるようになっています。

ただし、専門的な学術書の性格を帯びた書物であるため、独学で取り組むには難しい面もあることを鑑み、入会された月を含め、4ヶ月の間、当会の有志の研究会員によるメールでのサポートを実施しています。

新規入会された会員の方に追加された特典

具体的に言うと、『人間学とは何か』を読んだ感想をメールで送っていただき、それに対して当会研究会員が返信をする、という企画となります。新規会員特典なので無料です。

なお、メールによる学びのサポートは過去に会員登録をした方でも有効ですので、ご希望の方はお申し出ください。

- 新規入会者に人間学のテキスト贈呈
- 入会後4か月間Eメールによる人間学のサポート
- サポートは無料

◆編集後記◆

07年タッチパネル式スマホの登場からすでに20年近い歳月を流し、今や多くの人が情報のほとんどをスマホから取得するようになりました。ニュースも同様にスマホの動画サイトやアプリでチェックしています。そしてふと気が付くと自分の嗜好する分野の情報を優先的に取得するあまり、重要であっても関心ない情報は無視されて「知らない」状態になるのです。いわゆる「教養」といわれるものにも偏りが顕著になっている感じます。

ネットでの検索の仕方も変化していて、若者達の最新情報の取得方法はSNS、特にエックス（旧ツイッター）が主流だとのこと。そして今やAI（人工知能）の登場で、スマホに向かって話しかけて回答を得る時代へと移行しつつあります。こうなると、あえて記憶する必要がなくなり、人間の脳はどんどん退化していくのではないかという懸念さえ抱きます。将棋の藤井さんのようにAIを相手にして力を磨く人もいるので、うまくAIと共に存できれば、私たちの未来は理想的な発展をしていくであろうと期待しますが果たしてどうなるでしょうか。

さて、こうした激変する環境の中で当会は今年40周年を迎えます。学会としての存在価値を發揮し社会に貢献していくには、何をどうすべきか、ここで立ち止まって熟考する時になりました。これから約5年、10年のビジョンをどう描くのか、AIからヒントを頂戴しても方向性を決めるることはできないので、腦にたくさん汗をかいてまとめていかなければなりません。

（事務局 高橋）

情然の哲学 勝本義道 著

- | | |
|-----|-----------------|
| 序 章 | 存在の理由 |
| 第1章 | 自分とは何か |
| 第2章 | 原初のゆらぎ |
| 第3章 | 存在の構造 |
| 第4章 | 愛と自由と生命と理想 |
| 第5章 | 概念から物質そして人間へ |
| 第6章 | 人生の目的 |
| 第7章 | 世界平和に向けて |
| 第8章 | 日本の使命と役割 |
| 終 章 | これからの百年・千年紀に向けて |
- ※書籍代（送料込）2500円

購入ご希望の方は事務局までEメールでお問い合わせ下さい。

一般社団法人 日本人間学会事務局

E-mail : office.ningengakkai@gmail.com

**一般社団法人 日本人間学会 会報 2025年春号 №.28**

発行日 2025年3月20日 発行人 瀧順一郎

発行所 一般社団法人 日本人間学会 〒180-0022 東京都武蔵野市境5-4-3-405

HP : <https://www.ningengakkai.or.jp> Email : office.ningengakkai@gmail.com

☎ 03-6820-2417